

文 化

北海道新聞

平成21年6月29日

道内文学

俳句

松倉 ゆずる

のだ。

一方、東京農大の中川純一教授から、網走にあるオホーツクキャンパスで立ち上げた若者たちの俳句サークルの合同句集が送られてきた。「青春群像のみならず、美しい詩情」との中川先生の序文通り、たちまち引き込まれて読んだ。私にも俳句の弟子は数多いし、熱心さにおいても引けは取らないのだが、やっぱり若さが違う。

「ダイヤモンドダスト」と表題をつけたこの句集、△恋してるわけじゃないけど山笑う▽△豆まきや鬼のお面の中は愛▽△などがあり、天衣無縫なこうした句に比べると、既成の俳人たちの基本に忠実な作品は詩的飛躍が（まづ）ゆずる「俳人」「ア

ない分だけ、見劣りしてしまうカシヤ」主宰）

東農大サークル「ダイヤモンドダスト」

天衣無縫 あふれる若さ

△スキップをして帰りけり初

化粧 内倉小百合△△世界平和

と恋を語りし忘年会 遠藤菜実

子△△甘党の彼を溶かしてバレ

ンタイン 小樽知世△△帰り際

渡せるかしら毛糸編む 桂川曉

子△△熱燗を奨める君に頬赤ら

む 軽部智行△△袋から飛び出

す窓のVサイン 清野正敏△

△くしゃみ聞き彼女の可愛さ実

感す 富田純平△△サンタから

届いた手紙見慣れた字 平山桜

子△△寄せ鍋にくもるガラスの

あたたかさ 松井清弘△

「通り過ぎていた瞬間も、俳

句にすることで大事な一瞬とな

り余韻が胸に残ります。俳句を

作るのはまるで自分の心を掘り

出すような作業でした。中川先

生の『青春だなあ』と私たちの

句を褒めて下さったその笑顔、

忘れません」（編集後記 菜実

子）

分け合って食べて酸っぱくて

も蜜柑 純一

老成と若さ、どちらも魅力あ

ふれる作品である。

（まづ）ゆずる「俳人」「ア

カシヤ」主宰）